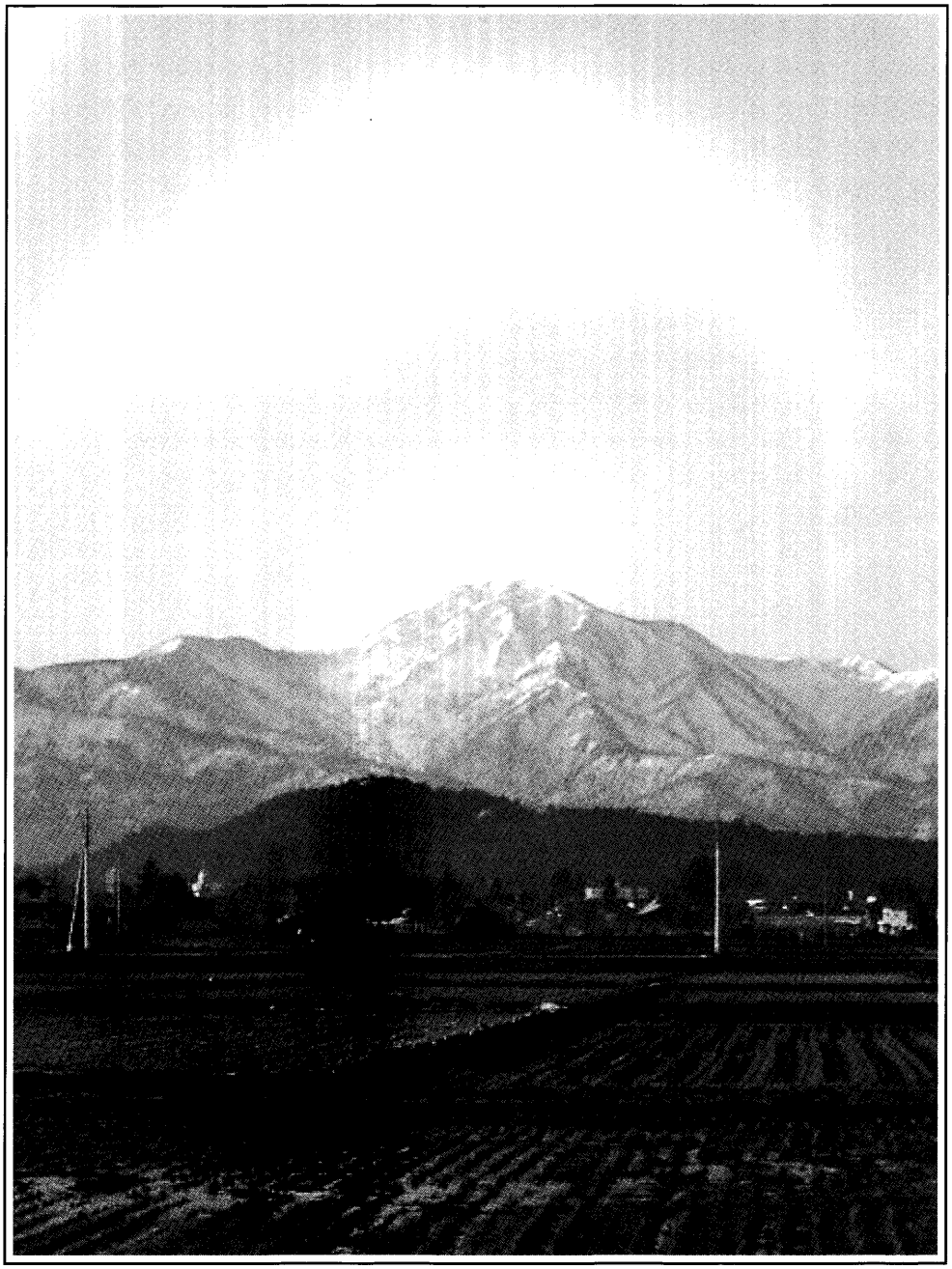
臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成17年(2005)大会号



新潟県立村松高等学校東京同窓会　No. 39

新潟県立村松高等学校東京同窓会
第４８回定期大会に臨んで

大会実行委員長　**深見 洋子**（高７回）

平成１７年６月４日、松高東京同窓会が４８回目の定期大会を迎える時に当り、過去の大会が走馬灯の様に想い出され、感無量の想いを禁じえません。

早いもので、私がこの東京同窓会に初めて出席してから既に、２０数年も経ってしまいました。あの頃、私の目には諸先輩方がみんな素適で、ご立派に映り、心から感服したものです。そして、やがては私も先輩方のように人様に対し、あのような素適な印象を与えられる人物になれるのかしら？　と思ったものです。

当時は、特別なイベント等は何も無くて只、それぞれ集まって旧交を温め、歓談して居たと云う感想を持ちました。出席者は殆ど旧中卒の方々ばかりで、司会を高卒の人が担当していました。

時を経て、出席者は何時の間にか新制高校卒中心となり、会報発行、会則の制定と内容が整備され形も整って参りました。然しながら、当初は斬新な企画や行事も、時と共にマンネリ化は免れず、近年はますます停滞気味になり始めています。

それでも、大会開催までに数回の役員会を開き、何とか魅力のあるものにして、大勢の会員の方々に参加して頂けるよう頭を悩ませ、議論を繰り返しながら計画を練り、何とか当日に漕ぎ付けております。

ここで、皆様方にお願いがあります。皆様はどの様な会を望んでいらっしゃいますか？どんな思いでご出席下さっているのでしょうか、忌憚のないご意見をお聞かせ願えれば幸いに存じます。そして、からっと新鮮な楽しい「集い」にしたいものと心から願っております。
皆様方の絶大なるご協力を賜りますよう切にお願い申し上げる次第です。

今回、お忙しい中をご出席賜りました皆様に心底より御礼申し上げます。誠に有難うございました。

新潟県立村松高等学校東京同窓会
第４８回定期大会 プログラム（敬称略）

日時　平成１７年６月４日（土）正午開催　　会場　高田馬場駅際ビッグボックス９F「アルファ」

第一部　総　会　―― 司会・進行　澤出 赳允(高６回)、高岡 五百子(高１２回) ――

1　開会の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　実行委員長　深見　洋子（高７）
2　東京同窓会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　会長　佐伯　益一（旧中２７）
3　村松高校同窓会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　会長　伊藤　淳一（高１）
4　村松高等学校長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　校長　水茎　芳英
5　平成１６年度委員会活動報告
　（1）　総務委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・委員長　金子　鶴男（高５）
　（2）　財務委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・委員長　塚田　勝　（高８）
　　○会計監査報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・監　事　佐久間英輔（高６）
　（3）　広報委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・委員長　大橋　貞夫（高１０）
6　閉会の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・司会者

第二部　懇親会　―― 司会･進行　澤出 赳允(高６回)、高岡 五百子(高１２回) ――

1　開会の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・司会者
2　乾　杯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・向山　律子（高５）
3　アトラクション・・・・・・・（1）フラダンス　（2）佐渡おけさ
4　抽選会&ジャンケンゲーム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・篠川（高２）・石黒（高９）
5　校歌・応援歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・全　員
6　手締め・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・副会長　塚田　勝　（高８）
7　閉会の言葉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・副会長　大橋　貞夫（高１０）

人の話に耳を傾けよう

東京同窓会長　**佐伯　益一**（旧中２７）

私は子供の時から年上の人や古老から、話を聞くのが好きであった。世間話から始まって故事来歴のあれこれ、硬軟取り混ぜた経験談、仕事上の知識等、根掘り葉掘り、何でも聞いたものだ。年寄りの人は子供達にそういう話をするのが好きなようで、囲炉裏端や陽の当る縁側などで、訊かないことまでよく教えてくれた。
それが今では随分と役に立っている。知識というか常識というか社交面に於いても話題には、こと欠かない。

然し昨今はそんな機会は滅多にない。いや場所もない。生活環境が変わったせいか、それとも世の中、進歩しすぎたのか、遺憾に思う。

そう言う私も何時の間にか年寄りの域に入ってしまい余命は少ない。年長者や先輩から教えてもらったことを後輩に伝え、教えてゆくことが大切であり、また伝統でなければならぬと思っている。

夫々の機会を得て話そうと思っていたが、これは間違いであった。これは自分から進んで話すことではなく、人から訊かれて話すことだと悟った。講演や講義を依頼されて話をするのとは訳が違うからである。
今の人達は自我が強いのか、中々耳を傾けてくれようとしないのが残念である。然し、これから伸びようとする若者や企業の中心にいる人達はよく話を聞いてくれる。また寄ってもくるし、教えられることが多い。

子供の時から土木工事の監督になりたいと憧れていた。卒業後、工科へ進み一応、土木の技術は修めた。然し、これはあくまでも机上の学問で現場に於ける知識は全く無かった。そして戦後、会社の下請けの飯場（労務者の宿舎）へ焼酎をぶら下げて行って土方連中と話をした。喜んで蘊蓄を傾けて次から次へと、穴の掘り方からコンクリートの練り方まで語ってくれた。ひまがあれば何度も行った。また人生勉強も出来た。　これが、その後の設計や積算、現場指導に大いに役立った。

人は生きている限り、色々の会議や集会に出る。
役目がら、打合せや会議に出席するが、議長役や司会者の不手際もあろうが、時間が掛かり過ぎているようだ。人の発言中に口を挟む人も多いし、前の発言者の意見を恰も自分の意見であるかの如く重ねて発言し会議がダラダラと続く場面が多く、笑いも出ない。そして中々結論に達しない。人の話には静かに耳を傾けていれば、要点も掴み易いし、適確な判断も出来る。その為、発言者は簡潔にものを言うべきだというのが私の主張である。

表題に「人の話に耳を云々」と書いたが、犬でも猫でも、凡ゆる動物が人間に向って常に語りかけているということを忘れてはならない。

さて此処で話を変える。

本年６月に東京同窓会第４８回目の大会が開かれる。会報の発行も今回で第３９号となるのは立派であり、喜びに堪えない。担当役員諸氏の努力に感謝したい。

多くの方に会えるのは楽しみであるが、永年お付き合いのあった先輩諸兄が少なくなってきているのはなんとしても寂しい。私も老齢の域に達し体も不自由になった。過去何回か理由を述べて辞任を申し出たが聞き入れて貰えなかった。会長職は２２年を超え、言いたい事は言い、書くべき事は全部書き尽くし、やろうとした事も全部やってきた。思い残すことはない。

正に世代交代の時期にきている。耳を傾けて欲しい。

忘れ物

今井 孝宏（高１０回）

一月、数十年ぶりで村松を訪れた。その一週間前から天気予報をみて大雪を予想し、完全武装で出かけたが、あにはからんや田畑に多少の雪はあるものの街中はからからで拍子抜けする。

楽しみにしていた新津駅ホームの立ち食い蕎麦は姿を消し、田圃の中の一本道であった五泉新道はすっかり市街地と化し、もとより蒲原鉄道の電車が走っている筈もなく、時代の変化をまざまざと見せ付けられた想いであった。まあ、それも致し方ないことであろう。

しかし、城川の土手から西山を望んで愕然とした。なんと、かっては田の畦道に点々と見えたハザ木はすっかり無くなり、其処ここの屋敷森も姿をとどめず、川岸が欝蒼と茂っていた五分一川は只の用水路となって西山の麓までのっぺらぼうであった。

松高生の頃より今まで“村松”は蒲原平野のドン詰りにありこれと云った産業も無く、観光を売物にする程のメジャーな景勝地でもない。僅かに早出川の渓流が隠れた財産であったものが、これも上流にダムが出来て見る影も無くなったと聞けば、そこに暮らす人々の人情の濃やかさ等はさて置き、とても県内外から人を呼び、例え新潟市のベッドタウン化してでも町そのものの存在価値を他に知らしめることは出来ないであろうと思っていた。

しかし、しかしであった。大蒲原の田圃の真ん中から東を見て吃驚した。大パノラマ！管名岳を中央にして左に五頭山・菱ヶ岳、遠くかすかに飯豊連峰、右側は銀次郎、青里岳などの河内山塊を挟んで名峰白山、更に一寸顔を出している粟ヶ岳と白く雪化粧した山々がずらりと勢揃いしているではないか。子供の頃から見ていた筈だが全く記憶に無い程の新鮮な驚きと感動であった。
そうだ吾が故里にはこれがあったのだ！
これこそが吾が村松の財産だと今更ながら気がついた。

その夜、奥方の手料理で車麩の煮物を肴に、年老いた級友と至福の一献を交わした。
美味圧巻は翌朝の車麩とジャガイモの味噌汁。

風薫る村松の山　白山の巌にいまだ根雪残るや

ありがとうございました

①平成１６年度・会費納入された方々（敬称略）

◎旧中の部（２３名）

相田忠亮、相田和平、五十嵐一郎、板垣文平、伊藤勇五
伊藤達郎、伊藤秀男、遠藤　順、亀嶋　謙、笠原健二郎
黒井伊作、熊倉　悟、斉藤和男、佐伯益一、　佐藤豊夫
寺田徳隣、成海正弘、西山荘平、松尾　貢、　武藤三郎
矢部五郎、横松宏平、吉田公男

◎高校男子の部（１０７名）

青木　猛、青木敏和、浅井昭男、新井康夫、　阿部　勇
安部　實、伊藤　馥、伊藤和賢、石黒四郎、　石川　滋
今井敬弥、大島惣四郎、大西範孝、大橋貞夫、大橋秀雄
小笠原一憲、岡村嘉志、笠原静夫、梶屋庄佑、加藤喜七
加藤清治、笠原大四郎、金子鶴男、金子健二、亀山知明
川合敏男、川村莞爾、神田弘毅、杵渕政海、　木村安雄
熊倉富次、雲村俊慥、郡司正文、剣持常泰、　小池生夫
小出博三、工　幸雄、小日山芳栄、小柳　実、近藤英洋
近藤尚志、近藤洋輝、斉藤正義、酒井俊昭、佐久間英輔
篠川恒夫、佐々木秀和、佐藤栄治、佐藤　克、佐藤　赳
澤井　昭、佐々木秀三、沢出赳允、鈴木健司、鈴木忠雄
鈴木輝雄、鈴木多喜男、下野文幹、新保　優、杉本芳雄
関塚　豪、瀬倉　薫、瀬倉武志、田代信雄、　高岡雄三
高久貞夫、滝沢信喜、高地　彰、高地　勝、　高山幹雄
塚田　勝、土田　猛、坪谷次郎、弦巻一郎、　弦巻　等
鶴巻旒三、中川善隆、中村雅臣、中山　健、　二宮文三
長谷川五郎、長谷川吾一、長谷川宏一、長谷川洋夫
根本俊夫、羽賀道信、服部修治、羽田清之輔、原田　実
廣田達衛、堀　直昭、松尾正春、松田輝夫、　間藤謙一
丸山貞次、湊　久直、宮沢正由、村川恭平、　村川忠司
目黒義二、八木又一郎、簗取正道、山崎輝雄、山崎豊吉
山田俊治、吉井　清、渡辺八郎

◎旧高女の部（１４名）

石井洋子、一氏愛子、内田道子、大井淑子、大橋玉枝
小林早月、佐藤　治、佐藤玲子、新保清子、鈴木節子
田村ミツエ、中野松葉、藤崎トヨ、前川れい子

◆平成１５年度分会費納入者名
　大橋玉枝
◆平成１７年度分会費前納者名
　高岡雄三、松田輝夫

◎高校女子の部（５０名）

安達繁子、阿部ミサ子、荒井るり子、安中克子、飯利　幸
五十嵐八瑞、大嶋エミ、大野靖子、大橋マツエ、緒方康子
緒形美惠子、岡部ユキ、小沢幸子、風岡智鶴子、片柳ムツ
神田正子、木村孝子、小島典子、近藤燦子、　雑賀和子
斎藤英子、斎藤弘子、佐久間順子、佐藤綾子、佐藤八重
佐々木恵美、白石キヨ、鈴木則子、高尾桂子、出口テル
高岡五百子、田川百合子、高浜つる子、滝沢美惠子
寺山征子、徳永道子、中島和子、中村エツ、波多ミサエ
馬場淑子、樋口綾子、深見洋子、升本久子、　松本知子
真水道子、向山律子、宮腰ヨイ、山西愈佐子、横溝田鶴
渡辺厚子

平成１６年度会費納入者数
男子＝１３０名　女子＝６４名　合計＝１９４名

②平成１６年度・寄付された方々（敬称略）

◎男子の部（７名）金額＝３０，５００円

１０，０００円　竹谷十三五
７，０００円　今井敬弥
３，０００円　松尾正春
２，０００円　木村貞一、小日山芳栄
　　西山荘平、武藤三郎、横松宏平
５００円　山田俊治

◎女子の部（３名）金額＝６，０００円

２，０００円　緒方康子、新保清子、横溝田鶴

合計１２名　　金額３６，５００円

お願い

住所等の変更があった場合、または変更のご予定がある方は速やかに事務局までご連絡をお願い申し上げます。

事務局　〒157-0061
東京都世田谷区北烏山3-18-20
八木　又一郎　方
Tel&Fax　03-3307-1048

平成１６年度会計収支決算書

（平成１６年４月１日より平成１７年３月３１日）

新潟県立村松高等学校　東京同窓会

収入の部（単位：円）			支出の部（単位：円）		
特別会計			特別会計		
第４７回大会収入(No38 既報)		７１７，０００	第４７回大会支出(No38 既報)		６３４，７０７
大会残金		９６，０３９			
一般会計			一般会計		
① 平成１６年度　会費		５８２，０００	① 会議費		７２，３８１
男子　１３０名	390,000		（幹事会・広報委員会）		
女子　６４名	192,000		② 会報発行費（年２回）		３９６，６７６
計　１９４名×年額（3,000）			編集費	6,273	
② 平成１５年度　会費		３，０００	ＮＯ３７印刷費（500）	141,750	
女子　１名	3,000		同発送費	34,618	
③ 平成１７年度		６，０００	ＮＯ３８印刷費（500）	141,750	
男子　２名	6,000		同発送費	45,710	
			封筒（含印刷費）	21,000	
④ 平成１６年度　寄付金		３６，５００	宛名シール	5,575	
男子　９名	30,500		③ 印刷・通信費		２９，９３０
女子　３名	6,000		（切手・ハガキ）	19,000	
⑤ 利子		４１	（印刷）	10,930	
			⑤ 一般送料（宅配等）		１６，３６６
			⑥ 年会費振込手数料		８，６３０
			⑦ 現金振込手数料		１，２３０
			⑧ 県人会対応費		１６，８７５
			（加入賛助会費）	10,000	
			（会報購入・送料等）	6,875	
			⑨ 新潟中越地震義援金		５０，０００
			⑩ 慶弔費（弔）		１０，０００
			⑪ 交際費		６，４０７
			⑫ 諸経費		１４，３５９
			（写真・交通費・消耗品）		
計		６２７，５４１	支出合計		６２２，８５４
⑥ 平成１５年度から繰越		１，０８４，０３８	差引残高		１，１８４，７６４
郵便貯金	1,056,459				
現金	27,579				
⑦ 第４７回大会残金		９６，０３９			
収入計		１，１８０，０７７			
合　計		１，８０７，６１８	合　計		１，８０７，６１８
※　１７年度会費（重複２名）は１６年度に計上済み			１７年度へ繰越の内訳		
			郵便貯金	１，１４８，００６	
			現金	３６，７５８	

上記の通り報告いたします。　平成１７年５月６日　会長・佐伯益一㊞　財務委員長・塚田　勝㊞

上記の決算書は監査の結果、適正と認めます。　平成１７年５月６日　会計監事・佐久間英輔㊞　安達繁子㊞

平成１６年度 東京同窓会の動き

４月２４日(土) 編集会議（会報３７号）
１２：３０ 新潟県人会館
４月２４日(土) 幹事会
１３：３０ 新潟県人会館
平成１６年度大会準備
会長選出委員会設置
５月 ９日(日) 会長選出協議会
１２：３０ 新潟県人会館
５月 ９日(日) 幹事会
１４：００ 新潟県人会館
大会実施細目・案内状発送 332 通
６月１９日(土) 東京同窓会４７回大会
１２：００ 東天紅上野店
出席者総数 73 人・会報配布 77 通
７月 ４日(日) 幹事会
１４：００ 新潟県人会館
会報発送 221 通、４７回大会総括
９月 ４日(土) 幹事会
１４：００ 新潟県人会館
東京同窓会の運営について
９月２５日(土) 編集会議（会報３８号）
１４：００ 新潟県人会館
１０月３０日(土) 編集会議（会報３８号）
１３：００ 新潟県人会館
１０月３０日(土) 幹事会
１４：３０ 新潟県人会館
１１月１７日(水) 会報３８号原稿を第一印刷へ
１２月 ９日(木) 総務委員会
１７：００東京ガス四谷クラブ
１６年度の担当・活動について
１２月２５日(土) 幹事会
１４：００ 新潟県人会館
会報発送・幹事会・忘年会
２００５年
１月２０日(木) 総務委員会
１７：００東京ガス四谷クラブ
会員拡大,会則見直し,総会の件
２月 ５日(土) 幹事会
14：00 新潟県人会館
東京同窓会４８回大会について
２月１９日(土) 実行委員会（48回大会）
11：00 BIGBOX「アルファ」
大会会場に関する打合せ
２月26日(土) 総務委員会
１７：３０東京ガス四谷クラブ
実行委員会計画案・名簿管理他
３月 ５日(土) 編集会議（会報39号）
１３：00 新潟県人会館

万国産業成果大博覧会

沢出 赳允（高6）

今年2月１７日、愛知県常滑市沖に中部国際空港「セントレア」が開港した。3月２５日から１８５日間、愛知万博「愛・地球博」が開催されている。愛知万博は、昭和４５年（１９７０）大阪府吹田市千里丘陵を会場に、アジアで初めて開催された大阪万博以来３５年ぶりに日本での「万国産業成果大博覧会」通称「万博」である。

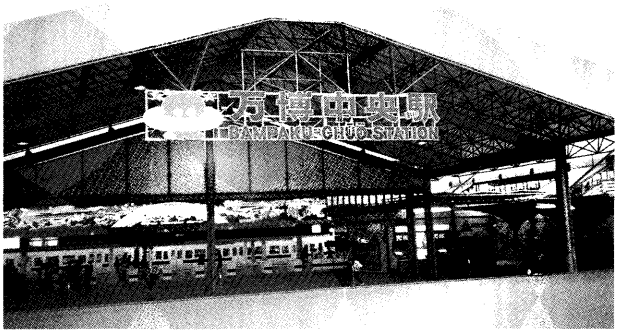
大阪万博は７７ヶ国が参加し延べ6，４２２万人が入場、万博最高を記録し、テーマ曲「世界の国からこんにちは」が大ヒットした。展示品ではアメリカが出展した「月の石」に人だかり。入場料８００円。

愛知万博は超伝導リニモやロボットが活躍、シベリアで発掘されたマンモスに人気集中とか。私の大阪万博の思い出は「猛暑の中での長蛇の列」…大阪万博から３５年経て産業成果はどう進化したのか大変興味がある愛知万博である。入場料は4，６００円。

私は愛知万博が日本で三度目の万博だと思っていた。第一回目は大阪万博、二回目が１９８５年のつくば博、今回の愛知で三回目だと認識していた。
ところが愛知万博で二回目だという。つくば博は万博ではないことが分かった。つくば博の正式な名称は「つくば科学技術博覧会」という特別博覧会であり、入場料は２，７００円であった。

私が「つくば万博」と思っていた理由は、つくば博覧会開催中には国鉄（現ＪＲ）常磐線に「万博中央駅」（写真）が設置され、また、駅から会場までのシャトルバス乗り場にも「万博会場行」と表示してあったからである。

主催者が万博と表示しておきながら「万博ではなかった」といわれても納得し難い。万博でないのに、なぜ駅名を「万博中央駅」とし、バス乗り場にも「万博会場行」と表示したのであろうか。



万博中央駅 1985. 4. 19

ニューイヤー・コンサートと地球規模の被災

今井　敬彌（高4）

2005年元旦、私達夫婦はウイーンのMusikverein（楽友協会）の大ホールに居て、ニューイヤーコンサートが始まる午前11時15分を待った。協会正面には右側にウイーン市観光課が定めた歴史的意義のある建物に掲げられる赤と白の旗の左側に、横幅約2m縦約10mの喪章が掲げられていた。ホールはそう大きくもない定員1000人程度であろうか。しかし、世界に知られた演奏会なのに立見席もあるとは愉快である。指定の座席はバルコンで、階上ではあるが演奏者席まで少し遠いようだ。
天井には、ふくよかな女性像や無心で遊ぶ子供の絵柄が展開し、大きく眩いようなシャンデリヤが規則正しく会場を照らしている。この会場には世界の国々から聴衆が集まっているようで、交わされる会話はドイツ語だけではない。日本人もたくさんいる。おそらく、数えれば100人は優にいるだろう。

ロリン・マゼールさん指揮のコンサートは定刻より少し遅れて、ヨハン・シュトラウス2世のインディゴ行進曲から始まった。そして「上流階級のポルカ」と続き、一曲が終るたびに万雷の拍手が会場からわきおこる。
ウイーン・フィルの楽団員の演奏は、晴れやかで心地よく大ホールに響きわたり、ちょうど小雨だった朝の天気を吹き飛ばし、陽光を引き寄せるように思えた。勿論、私たちも一曲ごとに限りなく拍手を送った。7番目の「インドの舞姫」の演奏で休憩に入る。時計は12時を過ぎている。

さして広くないロビーではワインも売られているようだ。暫く休んでから、第2部は喜歌劇「美しきガラテア」序曲から始まった。幾つかの曲目の演奏後、年末のスマトラ島沖大地震と大津波で被災し死亡した人達への復旧基金へのお礼が関係国代表から述べられた。この後、マゼールさんからはスマトラ島沖大災害で東洋の人達が苦しんでいる最中であり、例年のラデッキー行進曲の演奏は取止める旨の発言があった。

ご承知のように、1278年に勃興したハプスブルク帝国は、第一次世界大戦後の1918年に解体されるまで600年間にわたりウイーンを首都に中央ヨーロッパに君臨してきた。18世紀、女帝として手腕をふるったマリア・テレジアや、その娘でフランス・ルイ16世の后となり、フランス革命の露と消えたマリー・アントワネットの名前を知らない人は、まずいまい。栄華を誇ったこの帝国にも19世紀の半ば転機が訪れる。1848年パリで起こった2月革命はウイーンに飛び火し、帝国内のイタリアのミラノでも民衆が蜂起した。この時ミラノの鎮圧に当ったのが、ラデッキー将軍であった。父ヨハン・シュトラウス1世は、この功績を讃えてラデッキー行進曲を作曲したと言われており、いわば皇帝支持派であった。ラデッキー行進曲を演奏しない趣旨は、武器により多くの民衆を鎮圧したことにあるようである。

19番目の曲目ポルカ・シュネル「電気的」を終わった後は、アンコールにより恒例の「美しき青きドナウ」が披露された。何十回も聴いているが、やはり感銘を受ける。最後に、マゼールさんが日本語で“新年おめでとうございます”と挨拶された。時計は既に午後1時15分を廻っていた。

振り返ると、2004年は吾が郷里でも災害が多発した年であった。私は現在、柏崎・刈羽原発設置許可取消訴訟の弁護団長を仰せつかっているが、東京高裁の2月3日の最終弁論にあたり、次の様に原発本質論の外に災害多発原因論を述べた。

「1　2004年という年は地球規模で災害が多発した年であった。7月20日12時58分東京の気温は39.5度に達し、1923年観測以来史上最高記録を更新し、10月19日から20日にかけてわが国に上陸した台風は10個目でこれも史上最多であり、海岸・河川の堤防決壊、崖崩れ、強風等により多くの人命と家屋が失われ、道路や鉄道の断絶をもたらし収穫直前の農産物に大きな打撃を与えた。

柏崎市刈羽村とその周辺に住居する控訴人らの新潟県でも、7月13日に集中豪雨が三条市や中之島町を襲い、五十嵐川の左岸が決壊して家屋が浸水し、逃げ遅れた老人を中心に多くの死者を出す惨事に見舞われた。

そして10月23日17時56分北魚沼郡旧川口町、堀之内町、小千谷市、長岡市を震源地とするマグニチュード7の中越大地震が発生した。錦鯉と闘牛の里山古志村は壊滅した。一時期中越地方は陸の孤島となった。立石証人が、関連として新潟地震（1964年M7.5）と善光寺地震（1847年M7.4）の震源域に挟まれた全長140Kmの区間が空白域として注目すべきとの証言が、今や警告のように感じられるのである。…中略…

更に世界に目を転ずれば、12月26日8時頃にインドネシア、スマトラ島沖で発生したM9.0の巨大地震が記憶に新しい。世界を驚かせたのは、そのエネルギーが阪神大震災の160倍であり、津波が…中略…地震発生から8時間後には6000キロを越えてアフリカのソマリア、ケニアに巨大な水の壁が到達し、大きな被害をもたらしたことである。…中略…

災害の多発は、国連のいう地球規模の気候変動が進展しつつあるからであり、地震や津波ひとつ取上げても、かって人類の経験した事の無い被害規模を想定しなければならない。」

「4　これまで述べてきたように、人工元素プルトニュウム239が人類に及ぼす本質的潜在的危険性とその完全な防護手段を持ち合せていないことは、原子力安全委員会でも認めているところであるが、地球環境の変化に対応する為には大量生産、大量消費、大量廃棄の20世紀型産業から地球環境保全の21世紀型産業への転換が必要であり、その為、国連主導の下の気候変動枠組条約国の京都議定書がいよいよ批准されることになっている。

風力、太陽光発電など自然発生エネルギーを活用して原子力発電から脱するドイツ、イタリーをはじめ、ハイブリッド車、電気自動車の実用化と共に酸素と水素の化学反応による燃料電池が開発、実用化されてきており、人類には大きな期待が開けてきた。
…中略…

21世紀に入った現今、これまでに論述してきたところから原子力発電に対する対応は一新されなければならない。裁判所は地球環境を護り、国民の生命、身体を護るという原点に立ち返り、単なる手続的審理方式ではなく、裁判所自体の審理・判断基準を設定して、製錬、加工、設置・運転、再処理、使用、廃棄の全てに実体的審理を及ぼすべきである。」

私は101号法廷で口頭陳述しながら、新ためて楽友協会の大きな喪章を思い浮かべ、三条市の大水害や中越大地震による多くの被災者に想いを致し、一日も早い復旧を願ったことだった。

青春の想い出

思い出せば儚くて切なくて万感の想い・・・・

わたくしの思い出　　亀山　知明（高３）

私の思い出・・・それもタイムカプセルを開けるような青春時代のことをと云うことで、振り返ってみた。

とかく、ロマンチックなもの、懐かしいこと等になり易いが、戦後６０年、人生で言えば「還暦」と云う節目に当り、私にとって「トラウマ」のように心に残っている「６０年前の出来事」。昭和２０年、私が１２才の年、「長岡」で遭遇した戦災についての思い出。

夜半、空襲により焼夷弾で火に囲まれた街の中を、抜刀した憲兵隊の兵士に導かれながら郊外の田んぼの中に避難した時の恐怖。そして翌朝、街に戻った私の目にした光景は、残り火と煙の立ち込める中、面影も無く焼き尽くされた家の門々で、唯、呆然と立ち竦んでいる人々の姿が・・・。

昨今、高齢者社会になって来たと言われながらも、多くの人が戦争による災害などは過去のこととなり、むしろ地震や津波、台風など自然災害に対する関心が高く、防災も二次災害の防止、発生後の生活面への対応等に苦慮している。これらは、どんなシミュレーションを繰り返しても、自然相手にはパーフェクトな答えは期待出来ず、砂上の楼閣ともなりかねない。

そう言う意味では、人為的な戦争のない平和な社会では、それぞれが如何様にも生きられる。私のような「トラウマ」を持っている者にとっては、二度と繰り返してもらいたくない６０年前の思い出である。

加齢と共に、いろいろなことの味わい方が深まり、そして、懐かしさにどんどん満ち溢れて来るような昨今、「６０にして立つ」である。お金や物だけでなく、心、満足、趣味などでの生きがい・・・そして、人として忘れてはならないことにもう一度目を向け、同窓会などでは人と人との結びつき等も確認して、こころ豊にすごせるよう努めたいと思っている。

あの先生は今・・・・最後の授業

高地　彰（高８回）

青春も大分手前の少年のころ、国民学校二年生の夏、戦争に負けた。当時、父の仕事の関係で満洲の遼陽というところに住んでいた。日本人だけ住む百軒の住宅で何不自由なく過していた。日本が負けた、とのニュースが電流のように流れ、日本人住宅一帯は緊張した。

夏休み中のある日、従兄弟と「学校へ行ってみよう」と、連れ立って向った。歩いて２０分ほどの橘国民学校の校門をくぐり、真先に講堂に行くと、なんと御眞影のある戸袋が無残に壊され、中はがらんどう。教員室もめちゃめちゃに破壊されていた。教室は床板が剥がされ、机や椅子はほとんど無い。身体中が震えた。

怖くなって走って家に帰り、親にそのことを話すと「二度といくな」と叱られた。暴徒が横行していたのだ。

二学期が始まっても教室が無く、住宅にお住いの女の先生が、ご自分の部屋を教室代わりに教鞭をとられた。厳冬の１２月も終わり頃、先生は暗い電灯の下で「二年生の勉強を全て終わりました。いつ学校が始まるか分からないけれど、あなたたちは三年生になれます」と仰った。

悪夢の年が明けて昭和２１年７月、着の身着のままで帰国した。無事三年生になれた。先生のその後は分からない。毅然とした若い先生だった。生きて帰られたと信じて今日まで来たが・・・。

青春時代　　塚田　勝（高８）

私の青春の思いでの１ページは野球とハンドボールが思い出されます。野球は小学校４年生から始めました。その頃は用具すら満足に無い時代でしたが、毎日野球に明け暮れていました。愛宕中学校に入りましたが、私は何となしに部活動をやらずじまいでした。

当時の愛宕中学校は野球部が強く、郡大会で優勝したほどの実力で、当時の優勝ピッチャーのＳ君から、高校に入学したら野球部に一緒に入部しないかと誘われたのです。Ｓ君は、小学校時代からの対戦相手でした。Ｓ君は既に高校より入部の誘いがあったようです。

残念ながらＳ君は入試に失敗し、私は入学出来ましたが空虚感で野球部には入らず、卓球部に入ってしまいました。１年生のある真夏の午後、練習が終わりボーとして校門を出た時に突然「何部か？」とＫ先輩に呼び止められ、「卓球部です」と答えたら、「先輩に向って敬礼しないとは何だ！」と言われて２～３発殴られ、その時の悔しさは忘れる事が出来ません。当時、野球部は県大会で優勝し、ハンドボール部は先輩達が「ハバ」を利かしていたので、２年生になったらどちらかに入部さえすれば守って貰えるだろうと考えました。

ようやく２年生になり、同じクラスの野球部員にさそわれたが、野球部は少し実力が落ち始めていたので止めにし、全国大会に出られる可能性はハンドボール部の方が高いと判断したのです。ハンドボールは県でも５～６校しかなく、上手くいけば全国大会に出られるだろうと考えた訳です。現在のハンドボールは室内競技になり、ルールも違うようですが、当時は屋外競技で１１人制でした。現在のサッカーを手でドリブルし、手で投げてゴールする大変ハードな競技です。

入部した時のキャプテンは八木先輩（現、東京同窓会事務局長）で、同期生は８～９名おりました。↗

彼等は１年生から先輩の世話や用具の整理、グランド整備、先輩のユニフォームの洗濯等々と苦労して来たようです。私は２年で入部したものですからそんな苦労をせず、とにかく早く皆に追いつき追い越そうと一生懸命に練習をし、思い起こせば当時の私は本当に気力、体力とも充実した日々を過していました。

春の大会、夏のインターハイ予選を勝ち進みましたが、２年生ではキーパーの佐々木、DFの鈴木が出場していました。県下では新潟高校、新潟南高校が強豪でしたが、ついに県大会で優勝しインターハイ出場が決りまりました。夏の合宿に入り、東京教育大学から先輩の捧さんが指導に来られ、徹底的に基本を叩き込まれたのです。１年生の時から苦労して来た同期生には申し訳なかったが、私は幸いにもインターハイのメンバーに選ばれて、大阪の藤井寺にレギュラーとして出場しました。捧先輩のご指導とアドバイスには今でも感謝しております。

３年生になってからも順調に勝ち、インターハイの東京駒沢大会に出場出来ました。しかし、世の中は広いものです。実力のある大勢の選手を目の当りにし、また二度の経験から「井の中の蛙大海を知らず」の諺をしみじみと実感したのです。１年生の時の思い描いた夢が２年、３年次と二度も達成できて、幸せな高校生活でした。

卒業後は会社に入り、野球チームを作って地域の大会などで野球人生を大いに楽しみました。何事にも前向きな気持ちで積極的に取り組むことが人生では大事な事と確信します。高校時代に学んだ基本に忠実、努力、気力、判断力は仕事にも大いに役立ったと信じています。

領土を守る気概が大切

日本の古来の領土である竹島を韓国が不法占拠しているのは周知の事実。国交上の大問題だが、これは当時の韓国初代大統領・李承晩が昭和２７年、勝手に海の上に線を引いて自国の領域にしてしまったものである。

日本の歴代内閣・政府は今まで一体なにをしていたのかと問いたい。「理解を求める」と言っているだけでは駄目だ。後世の為に頑張ってほしい。北方領土・南方諸島、みな同様である。

おかしな事は日本のマスコミが竹島を報道する際に、竹島と書いて括弧して（韓国名・独島）とわざわざ注釈を付けていることである。以前にも北朝鮮と書いて朝鮮人民民主共和国と括弧していたが、国民の批判を浴びて止めてしまったが今度はどうするのだ？一刻も早く改めてもらいたいものである。

この李承晩なる男は戦後、戦勝国と称して東京裁判判事団に参加を申し込んだところ、さすがにマッカーサーによって拒否されたと聞いている。

なにがヨン様だ！　彼だって竹島は自国の領土だと言っているではないか。　（伯）

名前と読みかた

新保　優（高１０回）

私の父は白山の麓にある、十全村蛭野の生まれである。私も小学校から高校までそこで育った。実家は農家であり、小作ではなかったが、苗字を許されるまでには至らなかったようで、明治になって戸籍法が実施された時に「新保」の姓になったと聞いている。新しく拓かれた田んぼと言う意味だそうだ。これが選ばれたいきさつは知らないが、この姓は蛭野に多い。先祖をたどると親族関係にある家が多いので、その人達が同じ苗字を選んだのであろう。

「新保」の姓は横浜市南版の電話帳には44名も登録されている。かなり知られている姓、例えば「新谷」でも登録数は 11 名にすぎないから、珍しい苗字とは思えないが、「しんぼ」と正しく読んでくれる人は何故か少ない。恐らくは、同じ姓を持つ古今の有名人が少ない為なのであろうが、ニイホ、シンポ、ジンポなど実にいろいろな読み方をされてきた。

特に関西に住んでいた時は殆どの人が読めず、その上に正しく教えても頑強にシンポと呼ぶ人が多かった。当初は相当にいらいらさせられたが、しまいにはこちらが諦めた。

また最近は少なくなったが、サービスの積りなのかも知れないが、わざわざ「神保」と領収書などに書かれて、後で迷惑したことが一度ならずあった。

このように、間違わずに呼ばれるのに努力を要する苗字を持った為か、姓名の正しい読み方が気になっている。

特に最近よく耳にする、中国人の姓名を日本読みにする習慣にはとても違和感を覚える。当人にも、国際的にも通じない上に、なじみの薄い漢字をむりやり音読みにして、どんな利点があるのであろう。日本にはカタカナ表示と言う、素晴らしい表現法があるのだから、例えば韓国人に対してのように（これも韓国からの抗議でやっと改めたのだが）、せめて正式な発音に近い表記をするべきだと思う。

戦後しばらくしての頃、米国人旅行者が世界各地の地名人名を、アメリカ流の発音で押し通して、ひんしゅくを買っていると何かで聞いた。そう言えば高校の音楽の教科書で、ベートーベンをベーソーベン、ショパンをチョピンなどと、わざわざカタカナ表記した、無神経と迎合の恥ずかしい例を記憶している。

所で、以前同じ会社に勤めていた中国人の友人に、奇妙な名で呼ばれる、このような日本の習慣が気にならないか聞いてみた。ところが私の意に反して、全く気にならないという。極東の小さな島国で、コチョコチョやりたいなら好きにして構わないと言う、いわゆる中華思想に根ざしているようである。反発を感じる人もあるだろうが、流石は大人の国の人だと、私は感心させられた。

お便りの中から　順不同・敬称略

東京新潟県人会広報委員　**市川　昭二**

「臥龍が丘は緑なり」新春号が雪の朝、届きました。厚く御礼申し上げます。佐伯会長の言われるように会報の類は面白くなければ読んでもらえません。貴誌は、「ちょっといい話」を随所に載せ、楽しく読めるように大変努力しておられます。新潟県人会報も見習って編集したいものです。よろしくご指導のほどを。

伊藤勇五さんの「いやーな感じがするニュース」全く同感です。過不足なく的確に纏められていて胸のすく思いがしました。

匿　名

会報第３８号の『青春の想い出』の記、楽しく読ませていただきました。

特に二人の女性会員の投稿は大胆で簡潔な文章で、人一倍多感・感激屋の私の胸が思わずキュンと締め付けられました。そして高３の孫と小５の孫娘の姿が何時の間にか私の往時の姿に重なってきて独り感懐に浸っております。人は、こういう思い出をたくさん持っているものなのですね。ありがとうございました。

美しい文章でした。また、いい企画でした。これからも楽しみにしています。

部外者から

旧制中学２７回生の同期会記事を読みましたが、なかなかユーモラスな記事でした。中でも横田めぐみさんの拉致された場所が写真入りで説明されていたのには感動致しました。今まで遠くに感じられていたものが身近に思えるようになったのです。また、鮭料理の献立表には驚きました。私も挑戦してみたいと思っておりますが、さてどうなることやら。大変ためになりました。

有難うございました。

ちょっと変な話

郵政民営化を巡って政府与党・野党間で侃侃諤諤の論議が行われている。異口同音に政局にはしないと言っているが『政局』とはいったい何だ？衆院の解散総選挙のことを指しているのだが、誰も解散とは言わない。解散によって職を失うことを恐れているからである。

それに会期延長だって。我々には内容のさっぱり分からぬ問題に無駄な時間と金を費やしているように思える。審議すべきもっと大事なことがある筈。国防と外交だ。

最近の政治家はずるくなった。　(伯)

菩薩無情

鶴巻　浩（高１０回）

かねてからの山行計画の実行日は、良く晴れた９月の初旬であった。学友の宮沢氏のリムジンで学友星氏宅へむかう。彼の娘さん（小学生）をメンバーに加えて中央ハイウエーを一路、勝沼インターへと向う。高速を降りやがて塩山市街地をとうり抜け、JR塩山駅の踏切を渡る。

コンビニと酒屋で食糧を調達する。　青梅街道を小一時間ひた走ると大菩薩峠入口にとりつく。

青梅街道と別れ、右の林道へと入る。カーブが続くが途中で娘さんが車酔となり、一時休憩を余儀なくされる。夕方５時すぎの山道はすでに暗く、菩薩の峠らしき山容も見え隠れしながら上日川峠へでる。

泊り客のＲＶ車が数台停っている長兵衛小屋を過ぎ、暗さがどんどんと増幅してゆく中を暫く走る。

頃合いの野営サイトを見つけたので早速テントの設営に取りかかる。

星氏用意の野菜と肉で牛鍋と酒落込む。酒を酌み交し山談義に花を咲かせ、天を仰げば満天の星はまるで丸いドームのプラネタリュームの如くである。これで明日の晴天は約束済みだ。９時頃外気が冷えてきたのでテントに入り、残り酒を平らげてシュラフにもぐり込む。

夜半に豪雨が突然テントを太鼓の如く激しく打ち鳴らし,全員ビックリして起き上がる。時計は午前１時を指していた。山の天気はこんなものとタカをくくっていたが、朝まで雨がうるさく不眠状態。

５時頃、車のラジオで台風が予想をはるかに越えた速さで来襲し、本日は一日中荒天と知る。登山中止と一決しテント内で朝食の準備に取りかかる。

テント撤収後、林道が雨のために閉鎖されることを危惧して早々の下山となり、青梅街道を多摩湖経由で帰京した。

・・・　ああ、菩薩無情　・・・

余計なお世話？

最近、茶髪があまり目立たなくなった。流行に飽きたのか元の黒髪に戻りつつあるのは良い傾向であろう。ところが近頃は若い女性の、しかも幼い子供連れの奥さん達も、細いズボンに入りきれない西瓜の二つ割を無理に押し込んだような、胸はこれ見よがしにメロンパン。背中もへそも丸出しルックで闊歩しているのが見受けられる。スタイルの誇示か、それともテレビのお笑い番組の見過ぎか。栄養がよいのか脂身が多いのか、つい先日もあまりに見事なヒップに見とれながら歩いていたら、曲がるべき街角を通り越してしまった。

男どもの目を楽しませて呉れるのは結構有難いが、痴漢に遭わなければ良いがと心配する。余計なお世話かも知れないが、周囲にはご注意を、自分自身をご大切にと願う。やがて夏が来る。ご無礼を申しました。　(伯)

歩くことは生きていること

雲村俊慥（高５回）

● いつでもワクワクした気分

私が東京の中に埋もれていく『江戸』を真剣に探しはじめたのは、平成元年一月からである。だから、とても数えやすい。今年で十七年目を迎えたことになる。

最初は『江戸を歩く会』に入会した。机の上で学ぶ歴史は不得手だったが、生きている史跡を足で探しまくるのはワクワクした。七十歳になった今も、出かける日の前夜は修学旅行に出発するようなときめきを覚える。

十年目で思いがけなく『江戸を歩く会』の会長に推された。以来、案内人について歩くだけというわけにはいかなくなった。自分が案内役をやったり、史跡の前に立って講師役を務めたりしなくてはならないからだ。

これは困った。会員には時代物作家から大学教授まで厳めしい顔ぶれがずらりと並んでいる。「頑張り甲斐がありすぎるぜ」。愚痴ってはみたが、私の取得といえば、負けず嫌いの性格以外になにもないのだ。

● 六十路を超えての新出発

当時は六十三歳。歳には不足はないが、頭の中は空っぽだ。まず本を読みだした。それから七年。今では私の書斎は江戸の書籍とガイドブックで足の踏み場もない。いつも本の中に首を突っ込んだ状態で生きている。

私が会長を引き受けてから、歩く回数を増やしたため、今年の八月で歩きだして百回目の記念祭を迎えることになった。このお祭りは村松高校で三年下級生だった小出博三画伯に紹介を受けて、東京・有楽町会館シルバーサロンで一週間に亘って開催することを決めた。

簡単に百回というが、一回で八キロメートル、通算して八百キロメートルも歩いたことになる。東京から岡山に達する距離を超える。しかし、これは公式的な徒歩回数。私はそれ以外にコースを考え、懇親会場を決めたりするので、同じ一帯を三度は歩き回る。さら取材でも歩くので、東京―岡山間を二往復もしているだろうか。

大学なんか四年間しか通わない。一体、何を学ぶのか。それに比べたら、私の七年間はぱちぱちと燃えている。

● 松五会も「歩こうかい」

そんな折に、また素敵な話が湧き上がった。村松高校の第五回卒業生（松五会）の人たちが「飲んだり食ったりするだけでなく、私たちも歩いてみようか」と言ってくれたのである。

やっと私の出番到来いうわけだ。名幹事・金子鶴男さんの記録によると、もうこの集いも五回目になるそうだ。

☆ 第一回は『両国の吉良邸跡と回向院をめぐる小さな旅』。宴会は人気力士だった寺尾関の営む『チャンコ寺尾』で盛り上がる。

☆ 第二回は『春日局の麟祥院と本郷・湯島への道』。宴会は故今村恒美画伯が愛した『居酒屋・赤提灯』で。

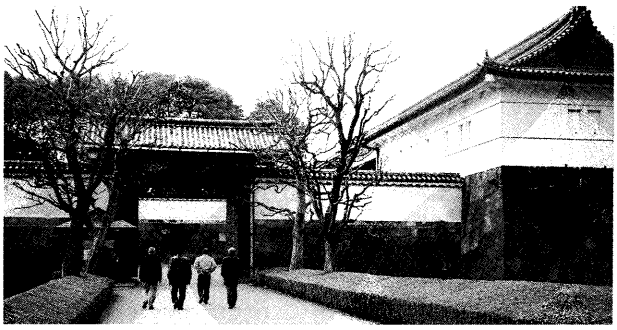
☆ 第三回は『築地から佃島へ、鬼平の足跡を追って』。宴会は月島仲通りで一番うまい『もんじゃ月島』で。

☆ 第四回は『究極の粋な街・神楽坂のかくれんぼ横丁へ』。宴会は文人墨客が構想に耽る『酒処・龍』で。

第１回・吉良邸に桜が満開

☆ 第五回は『桜花爛漫、江戸城千鳥ケ淵の千本桜に見惚れて』。宴会は松五会・熊倉芳夫さん推薦のおしゃれな『シーボニアメンズクラブ』で華やかに若返る。

この松五会の集いも、励まし合い、助け合いながら、延々とつづいていくにちがいない。



第５回・江戸城大手門を歩く

● 好きだから歩く、そして書く

私は歩くことで健康を維持しようなんて、まるで考えない。歴史に強いと言われても「先生」なんて呼ばれたくはない。ただ好きだから歩く。頭より足で考える。歩く夢遊病者という表現が一番当たっているようだ。

そんな私に『江戸ガイド』の注文がくる。有り難いことである。今年の秋には『歴史上の人物と歩く・花の大江戸道案内』（ＰＨＰ研究所）という三作目の読み物ふうガイドブックを刊行していただくことになった。

松五会の仲間たちが、そして村松高校の関東圏に在住する全同窓生が、この一冊を手にして東京の中の『江戸』を探し歩いてくれたなら、と願いながら、私は毎日ゆっくり筆を進めている。

松五会・幹事の皆さん

運もそろそろ

八木 又一郎（7回）

もう10年くらい前の6月頃でしたか、飲んで帰ったら夜中3時ころ吐血したので御茶ノ水にあるS病院で診て貰ったところ胃潰瘍と云われ1週間ほど入院したことがありました。この潰瘍は38年前からのものでしたが、その時内視鏡で診てくれた先生に高血圧症もあるので主治医になって頂きました。その後月に一回ほど通っていましたが、「内視鏡の科長」と云う立場の所為か何ヶ月かに一度、私の胃袋を見たがるんです。そこで6年前の5月に内視鏡で診て貰いました。私はモニターを見るのが好きで今回も覗いていると「あれ変なのがある」と先生が呟き、前回の潰瘍痕のそばにある数ミリの異様な物を掻きとったのです。後日、病院に行ったら「腫瘍です」と云われ「腫瘍って癌でしょう」と云うと「そうです」「どうしたらいいんですか」「切ります。胃は5層からなっていて1層目の粘膜癌ですから他に転移する心配はありません。しかし、場所が上の所ですから胃を全部とります。胃の下の膨らんでいるところは発見し難く手遅れになることが多いんです」とか。6月18日に胃部全摘出する。これは物凄いハンデになりますが、お陰様で今も毎日のように呑んだくれて生きています。内視鏡科長に主治医になって頂いたことで早く見付かり運がよかったこと、胃の手術をしてくれた外科の先生には私の外科の主治医になって頂き、こうしたいい先生に巡りあったことが私にとって幸運そのもので、有り難く思っています。

さて、プロローグが長くなってしまいましたが、昨年の1月21日夜11時50分ころ急に腹が痛くなり悶えていました。腹痛くらいで救急車なんて申し訳ないと思ったのですが、家内に救急車を呼んで貰い世田谷の北烏山から御茶ノ水のS病院まで運んで貰うことになりましが、その時には痛さで気は朦朧としていました。病院に着いたことは分りましたが、痛さのためすぐ失神状態になってしまいました。後は何も分らなくなり家内の話によれば、翌日病院に行くと先生が「当病院では、医師も施設も手当てすることが出来ません。このままでは死を待つだけです。残るのは高度救命救急センターに頼むしかありません」そう言ってくれたのが、その晩の当直医であった私の主治医内視鏡科長でした。これも運かもしれませんね。運ばれた病院も救急病院ですが、もしも普通の救急病院に運ばれて治療していたら恐らく死んでいただろうなと思っています。高度救命救急センターは都内に23箇所ほどあると聞いていますが、そこで紹介され運ばれたところが文京区千駄木にある日医大高度救命救急センターでした。

そこでは1人の急患に8人の各科専門のスタッフがチームを組んで治療に当っていたそうです。家内が入院手続きをして病室に入ったとたんチーフの先生が「重症と認定します」と云われたそうです。病名は「重症急性膵炎」とのことです。そして多臓器機能障害を併発して18日間意識不明で、体中点滴のクダだらけだったそうです。でも、面白いことに夢を見ておりました。ストーリーのある夢を幾つも見ているのです。今でも覚えています。結局55日間の入院でしたが、目を覚ましてから20日間は声も出ませんでした、夢の中にいる状態でした。高度救命救急センターに入った人で退院出来るのは10%以下とのことです。息子に聞くと、救急車が来たと思うと間もなく親族が呼ばれ、やがて、病室から出て行くのが殆どだったと云っていました。よく生きて退院出来たものと思っています。

つまらない話が長くなってしまいました。初めて知ったことをお知らせします。病院で「重症」と認定されると、都と協定している病院での治療費は、殆どを東京都が払ってくれるということでした。退院した後も6ヶ月くらいは同名病の場合は無料の医療券を貰いました。

この会報誌が届く頃には私の運はどうなっているだろうか‥‥などと考えつつ筆をおきます。

パソコンに挑戦する

ワープロを弄り始めたのが６５歳の時であるから、かれこれ１５年位が経つ。初めの機械が何年か経て毀れたので困った・困ったと言っていたら知人が不用になったからと言って譲ってくれた。

働き過ぎか、その二代目も動かなくなった。新品でも中古品でもとあちらこちらと探したが新品はもう作っていないし、中古品は在っても品質は保証しないと言う。なんで保証しない品物を売るのだと怒ってみても始まらない。娘が折角パソコンがあるのだから、それを覚えたら、と言ってくれたが中々難しいからと言って手を出さなかった。２年ほど前に娘婿が持ってきたものだが埃を被ったままである。しかし不便でならない。

なんとかやってみようと決心し、始めてから約１ヶ月テキストを読み、電話で教えを乞いながらの悪戦苦闘の連続であったが、遂に出来た。３００字を打つのに、なんと３時間かかった。印刷、保存までを終えた時は思わずヤッターと叫んでしまった。ところが、ところがである。翌日になると、やり方をすっかり忘れてしまった。また始めからのやり直しである。

然し、今度は前の時間の半分で済んだ。
機械は正直だ。ちょっとおかしな所を押すと画面が一変してしまう。元へ戻すのに一苦労する。それでも労は報われた。段々面白くなってきた。いろんな機能があるらしいから順々に挑戦してみようと思っている。

正に八十の手習いである。　　(伯)

東海七福神巡り

間藤　謙一（高９回）

在京９年の最後、時期はずれの６月に東海七福神巡りをした。通勤定期もありJR品川駅で下車、第一京浜国道(国道15号)を南下すること約20分、京急「新馬場駅」迄たどり着き、交差点を渡るとここが「品川神社」である。文治３年、源頼朝が海上交通の神「天比理乃咩命（あめのひりのめのみこと）」を安房から勧請して建てた。

品川神社・大黒天

国道脇に大黒天の石像があり、その脇に「東海七福神」の案内と所要時間を記した案内板がある。53段の石段を登ると社殿があり、この日は、めでたく一組の結婚式の真最中であった。尚、社殿の裏手には板垣退助の墓がある。

国道をまたいで５分程歩くと正安元年の創建と伝えられる天台宗明鏡山善光院養願寺(布袋尊)がある。御本尊

天台宗明鏡山善光院養願寺・品川の虚空蔵菩薩

は虚空蔵菩薩で「品川の虚空蔵さま」で知られている。

一分ほど歩くと、江戸時代末期安政二年に創建された一心寺(寿老人)がある。

一心寺

ここから旧東海道を３分程歩くと、和銅二(709)年創建の元品川総鎮守、荏原神社（恵比寿）がある。門前には商売繁盛の神である恵比寿神の石像が鎮座している。又社殿の脇には立派な舞殿もある。

荏原神社・恵比寿神

旧東海道の商店街（品川宿場通り）を10分程歩くと承応元(1652)年中興で真言宗海照山普門院品川寺（ほんせんじ）(毘沙門天)がある。明暦三(1657)年に鋳造された寺宝大梵鐘があり「鐘の寺」と呼ばれている。又宝永五（1708）年に造立された銅造地蔵菩薩坐像がある。江戸六地蔵の一つで一番大きく高さが275cmもあり、かっては鍍金が施されていたと言う。

品川寺・地蔵菩薩坐像

品川宿場通りを更に30分程商店街の終わりまで歩き弁天橋を渡ると、天祖諏訪神社(福禄寿)がある。建久年間の記録から1100～1190年遡り、寛永八(1631)年以前の創建と思われている。

ここから磐井神社への中間地点に、丸橋忠弥、天一坊、白井権八、八百屋お七等が処刑された「鈴ケ森刑場跡」がある。

ここで国道沿いに京急「大森海岸駅」を過ぎると間もなく右側に磐井神社(弁財天)がある。起源は敏達天皇の二年八月といわれ、1400年余りの歴史を誇っている。

七福神とは

恵比寿・・清廉をあらわし商売繁盛福徳の神
毘沙門天・開運厄除け財宝をもたらす栄光の神
大黒天・・福徳円満財宝をもたらす大願成就の神
弁財天・・愛情と知恵を授け富貴開運をもたらす神
福禄寿・・財運と人望と出世をもたらす神
寿老人・・延命長寿と福徳をもたらす神
布袋尊・・寛容で福寿財宝をもたらす神

と言われている。

本来、正月に七福神巡りをすべきで、色々と催しものがあるとのことである。「参拝御朱印色紙」や「七福神宝船」があるそうだ。二時間程の徒歩で巡る事が出来る。

東海七福神巡りのついでに、三代将軍家光が沢庵和尚を江戸へ招き寛永15(1638)年に建立した東海寺、鈴ケ森刑場で処刑された丸橋忠弥の首塚が残されている妙蓮寺、お富、与三郎の墓がある天妙国寺、又しながわ水族館等にも足をのばしてみたら如何でしょうか。

訃　報

笠原　久　さん　（高１２回）

平成１７年1月２７日にご逝去されました。
笠原氏は広報委員会に所属され、会報の発行に多大な御尽力を頂きました。
ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

訃　報

緒形　美惠子　さん（高８回）

平成１６年１１月１６日にご逝去されました。
ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

笠原君を悼む

大橋　貞夫（高１０）

正月気分も抜けて新年度の活動も軌道に乗り始めた頃、突然の訃報が入った。笠原君が肺癌のため急逝されたと云う。２年後輩だった彼は編集能力も抜群であり、次期広報委員長として密かに期待しておりました。
まことに無念な想いが強まるばかりです。もっともっと長生きしてもらいたかった。

彼は全国の方言を長年研究しており、平成１３年に**思い出の方言集「あったらもんだ」**を発行しております。ここ２～３年は改訂版の発行に向け心血を注いでおり、平成１７年１月、待望の改訂版発行に漕ぎ付けたのです。

ただ、出来上がったばかりの改訂版を手にしたのは入院先のベッドの上でした。しみじみ眺めていた時間が僅か2～３０分で他界されたそうです。

遺作となった方言集「あったらもんだ」右が改訂版

中学時代　君は戸倉から峠を
超えて　雨にも負けず風にも
負けず毎日通ってきた
いつも、ニコニコ笑顔で・・・
松校の通学も同じ笑顔で・・・
君ほどやさしい人を
私は知らない

合掌

亡き友、緒形美惠子さんへ

木村　孝子（高８）

「お早よう！昨夜メール送ったの見た？」
私がパソコンのイロハも解らなかった数年前、毎日モーニングコールをくれた美惠子さん。
「あ～また返信しなくては･･･」と嬉しくもあり、反面、少々プレッシャーでもありました。たっぷりおしゃべりしたので、今日はこのままバイバイかな？と思いきや、決って最後は「じゃーね、メール待ってるから――」
もうパソコンと向き合って悪戦苦闘、必死でした。
お陰で、なんとかパソコンと仲良くなれました。

ケイタイのメールもやっぱり先生は貴女でした。本当に感謝しております。「ねー美惠子さん。一生懸命、勉強すれば、天国の貴女と交信出来るようになるかしら？」
そしたら、私、うんと頑張ります。

小出博三氏個展

２月２７日（日）～３月５日（土）の間、小出博三氏（高８）の個展が有楽町の東京交通会館 B１で開催された。３月５日、上野の新潟県人会館において第一回目の編集会議があり、終了後、幹事諸氏と氏の個展に訪れた。
いつ拝観しても、故郷を想い出させられる様な懐かしい感慨を抱き、ほのぼのとした気分に浸れる。
今回、私の眼を一際惹き付けたのが秋の養老渓谷を描かれた絵である。昔、一度訪れたことがあり、あの時の風景がまざまざと想い出された。

これからも氏のご活躍をお祈りしたい。　　大橋　記

左から金子、八木、深見の各幹事と小出氏

加藤系一氏水彩画展

ここ数年、会報に執筆して下さっている加藤系一さんが水彩画の個展を開くと聞いて新潟まで観に行く。

「古稀を迎える年になったし、個展をやってみようかな」と、ちょっと恥ずかしそうに云ったのは昨年のこと。

彼はピュアな人と云うのがぴったりだと常々思っていたが、美術教師の彼が、全く異なる画風の水彩画家と出逢い、改めて弟子入りしたと聞いた時には驚いた。

人は年を経ると、新たに一から教わるなんてとても難しい事なのに、何て素直な人なんだろうって思った、と彼に云うと「あゝゆう描き方は知らなかった、と云うか、やった事がなかったから」と笑って云った。凄い人だなと思った。

会場に入って又驚いた。全体に漂う優しく，爽やかな雰囲気。こんなに透明感のある、少しの濁りも無い色彩を出せるのか、と不思議な程だった。

「色がとっても綺麗ね。絵の具は何を使っているの？フランス製とか？」と思わず訊ねると「ホルベイン」と事もなげに答えた。ホルベインは水との配合が難しいと記憶していたので只々感服するのみ。

会場は千客万来で賑わい、卓上には美しい花々。

彼の描いた民家からは、今にも住人が現れて来そうだし、サクランボは本当に瑞々しく、つい摘んで食べたくなってしまう。次の部屋へ入ると、可愛いピエロ人形の絵が静かに迎えてくれた。

加藤　系一氏（高７）・個展会場にて

——表紙について——

表紙の写真は残雪の残る霊峰・白山を４月、間藤謙一氏（高９）に村松町の外れから撮影して頂いた。

平成１７年６月　第３９号

表紙の題名・題字は佐伯益一氏（旧中２７）書

発行人　新潟県立村松高等学校東京同窓会
広報委員会

事務局　〒157-0061 世田谷区北烏山 3-18-20
八木 又一郎　方
Tel &Fax　03-3307-1048

第三回ゴルフ親睦会開催

平成17年4月14日（木）入間カントリー倶楽部にて松高東京同窓会の第三回ゴルフコンペが開催された。

当日は朝から晴天に恵まれ、絶好のゴルフ日和である。間藤氏が村松から参加され、遠距離にも拘らず一番乗りであったと聞く。スタート前の打合せで「本日は晴天なれば天気の所為に出来ないのだから頑張りましょう」と釘をさされ、9時31分に一組目がスタートして行った。

皆さんご高齢にも拘らず元気一杯にプレーされ、楽しそうなご様子でした。今回も亀山氏に便宜を図って頂き深く感謝すると共に、幹事の吉井氏には何かとお世話になり心からお礼申し上げます。

スタート前、満開の桜を背に

成 績（敬称略）

優勝・片柳ムツ、**準優勝**・間藤謙一、**3位**・笹川　隆

参加者名（敬称略）

1組　亀山知明（高3）、山崎輝雄（高8）、吉井　清（高8）

2組　笹川　隆（高5）、石川　滋（高5）、間藤謙一（高9）
大橋貞夫（高１０）

3組　片柳ムツ（高8）、岡部ユキ（高8）、鈴木輝雄（高8）

編集後記

東京同窓会も最近は高齢化が進んでいる。会員の中には六十を過ぎたからそろそろ顔を出してみようか、等と考えている人も多かろうと思う。年齢に関わり無く健康で元気に活動している人々は多いし、楽しく生活する心構えは大事な事である。それによって気力も行動力も自然に湧いてくるのではと思う。同窓会活動も如何に楽しく行うかが問題で、十人十色の人々が集まれば意見の合わない事は多々ある。「言は刃である」ことを忘れず、大人の知恵を出し合って、この会を発展させたいものである。

会長が八十の手習いとかでパソコンに挑戦しておられるが、その姿勢と努力は敬服に値する。

会員諸氏が新しい事に挑戦されて、いつまでも若さを保って頂きたく願い、ご健勝を祈るものである。

広報委員会　大橋　記

原稿を募集しています。

送付先
〒158-0094　世田谷区玉川4-20-8　大橋貞夫
Tel&Fax 03-3709-1570

校　　歌

旧・県立村松中学校

1．塵の巷を遠ざけて
雲たち迷う白山の
麓に立てる松の群
見よ凌霄の気を含む

3．落葉をくぐる流れにも
岩石砕く力あり
清きは水の姿にて
強きは誰か心ぞや

5．それ英雄も人傑も
人の子吾等がたぐいなり
嗚呼松城の健男児
勇みて立つべし諸共に

旧・村松高等女学校

1．愛宕の山のむら松の
常緑色の常磐なる
操を胸に日の本の
をみなの徳を磨かばや

2．心は身はも真夏なほ
日に輝ける白山の
雲にもまさる清さもて
正しき道を進まばや

3．其の名も高きこの里の
桜の花のうらうらと
のぼる朝日に匂うごと
気高き姿保たばや

新　校　歌

相馬御風　作詞
中山晋平　作曲

1．普く照らす天つ日の
光を浴びて年々に
伸びてしやまぬ若松の
ときわの志操いや堅き
学徒われらの在るところ
明朗の和気みなぎれり

2．見よ質実に清純に
進取の生気湧き溢れ
文化の花の咲くところ
希望は常に輝ける
道に我らを進ましむ
努めなんいざもろともに

応援歌

1．緑濃き臥龍が丘に
轟くは我等が歓呼
若人の高なる血潮
たたえつつ春の日めぐる

2．いざ叫べ若人の誇り
わななける力の腕
見よや君歓喜の胸に
輝くは永久の勝利

応援歌

1．臥龍原頭幾星霜
切磋琢磨の功を経て
はなくれないの香に匂う
誉れは高き松城の
健児が胸に血やおどる

2．我等がえらぶますらおの
誉れは海の湧くがごと
望みは雲のゆくがごと
月の桂をなゆずりそ
栄えある名をぞとこしえ
に

応援歌

1．松城健児六百が
祖国のために剛健の
大図をここに定めんと
送りいだせし我が勇士
覇権をゆずる事なかれ
我等六百ここにあり

3．今壮快の晴れいくさ
見よ雄叫びの只中に
我等が望み一筋に
肩にぞかかる勇戦士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり